

平成二十四年五月三十日(水)

第四二八回 史跡めぐり

世田谷方面玉電に乗って

サザエさん・吉田松陰・井伊直弼

NPO 法人 越谷市郷土研究会

第四二八回 史跡めぐり

世田谷方面玉電に乗って

サザエさん・吉田松陰・井伊直弼

- 日時 平成二十四年五月三十日(水) 雨天決行
- 集合 午前八時三十分 北越谷駅西口広場
- 昼食 世田谷区民会館で各自注文・各自負担
- 参加費 三、五〇〇円 (交通費・入館料・保険料・資料代など)
- 案内者 常任理事 篠原陸郎

コース

北越谷駅

↓ (田園都市線)

桜新町駅

(徒歩10分)

● 長谷川町子美術館 (サザエさん)

(桜新町駅→[田園都市線]→三軒茶屋駅)

(徒歩3分)

● 目青不動 (五色不動の青)

(三軒茶屋駅→[玉電]→松陰神社駅)

(徒歩10分)

● 松陰神社 (吉田松陰の菩提寺)

(徒歩3分)

○ 昼食 (世田谷区民会館)

(徒歩15分)

● 代官屋敷・郷土資料館

(徒歩15分)

● 豪徳寺 (井伊家の菩提寺)

(徒歩3分)

(宮坂駅→[玉電]→三軒茶屋駅)

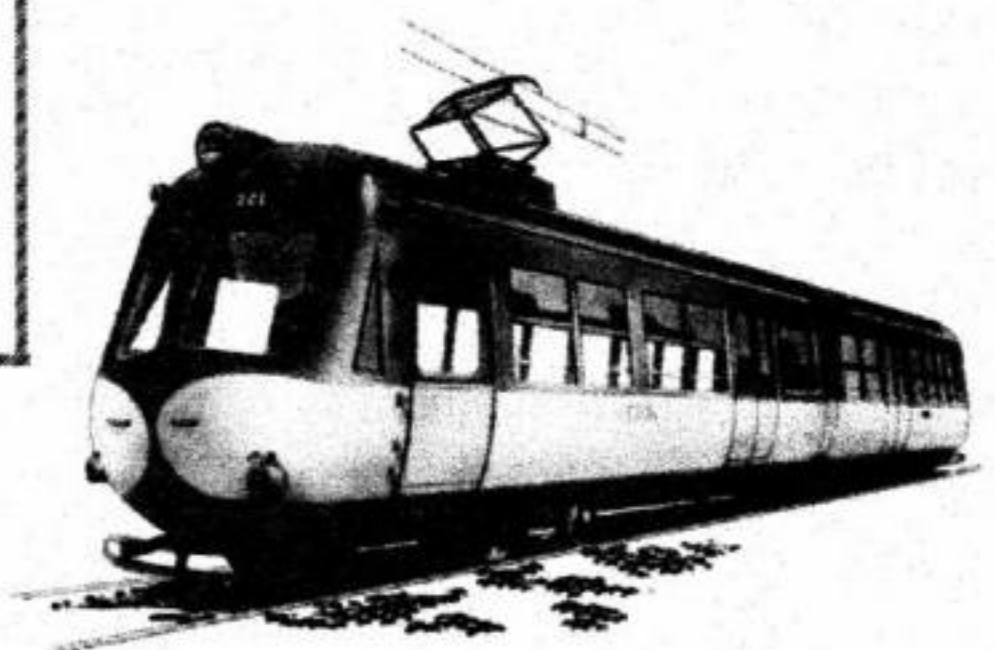
三軒茶屋駅

↓ (田園都市線)

北越谷駅

帰着 18:00予定

↑ 徒歩 ↓





宮坂駅(玉電)

世田谷区民会館

豪徳寺

松陰神社

松陰神社駅(玉電)

青目不動

三軒茶屋駅(玉電)

三軒茶屋駅(田園都市線)

代官屋敷・郷土資料館

桜新町駅(田園都市線)

長谷川町子美術館

至渋谷駅

2

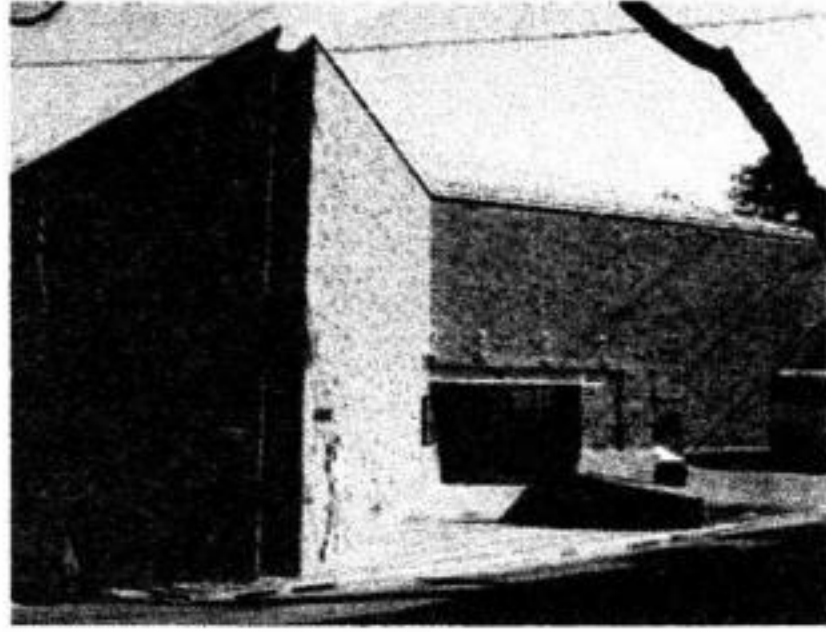
● 長谷川町子美術館

○長谷川町子美術館

- ・当美術館は『サザエさん』の作者として知られる漫画家・長谷川町子（1920〜92）と姉の長谷川毬子が集めた美術品を展示している個人美術館である。
- ・現在は財団法人長谷川町子美術館が、長谷川町子作品の著作権管理を行うとともに、美術館の運営にあたっている。
- ・美術品の外、漫画の原画や菊人形、絵画、磯野家の間取りのミニチュア、サザエさんのアニメの映像が見られるコーナーがある。
- ・売店では、この美術館でしか売られていないオリジナルグッズが多数販売されている。

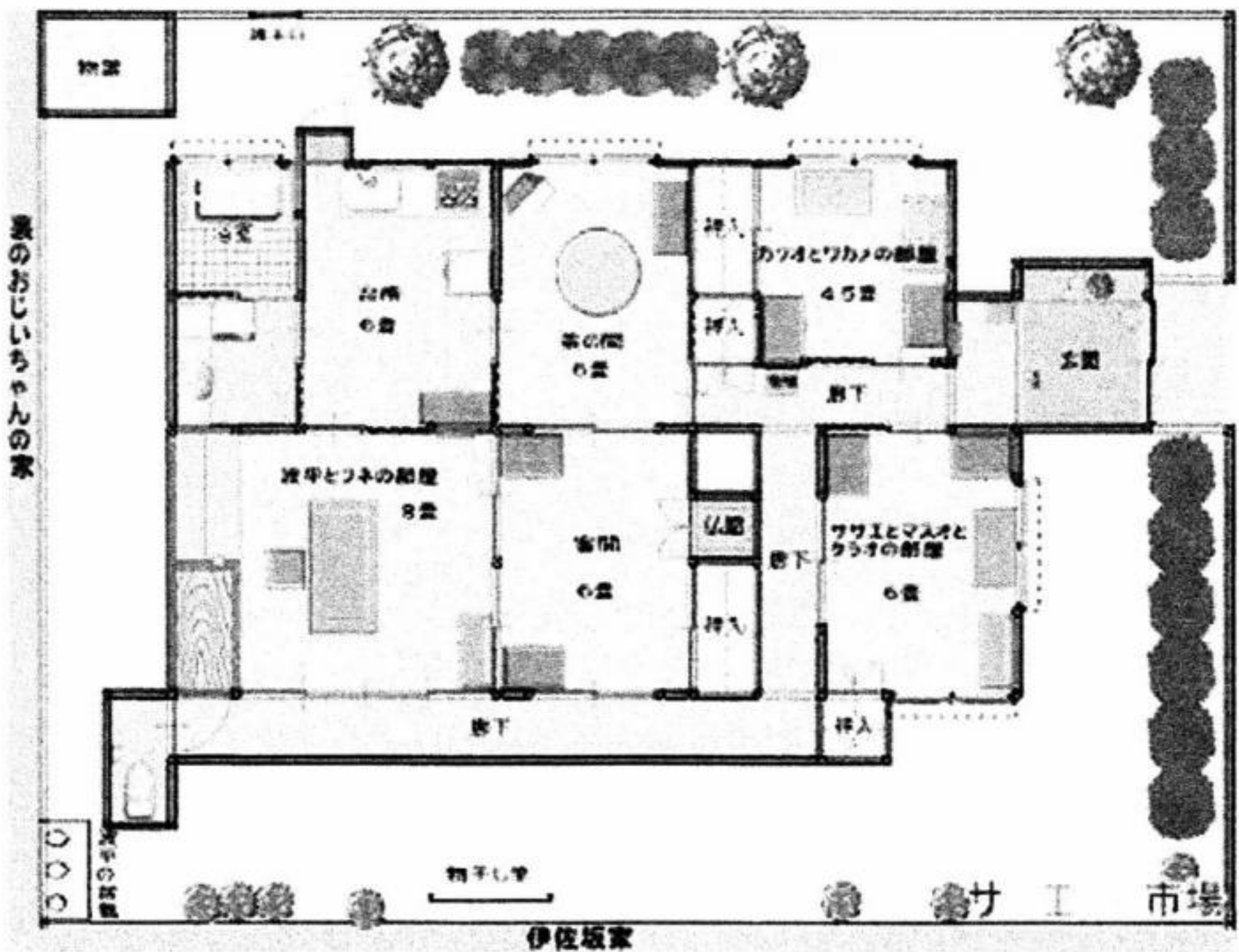
○沿革

- ・昭和60年11月3日、長谷川美術館として開館。建物は長谷川町子の著作を刊行していた姉妹社の書庫・流通センター跡地に建設された。
- ・平成4年、初代館長、長谷川町子亡き後、長谷川町子美術館に改名。二代目館長として長谷川毬子が就任。
- ・平成5年、姉妹社を解散。作品の権管理を財団法人長谷川町子美術館に移管する。



長谷川町子美術館

サザエさん宅間取り図



サザエさん家系図

(パンフより)

先祖幕末 九州
磯野源太



静岡 石田家

九州 波野家

毛が1本

東京 青山

男

妹 なぎえ

双子の兄 海平

波平

フネ

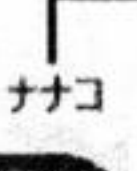
兄 鯛造

おこげ

弟 トシオ

妻

東京 入江家



ナナコ

男

男

タイ子

ハリスケ

妹

姉

兄

兄

(22くらい)

(24~26)

イクラ

(1.5~2)

東京 あさひが丘

毛が2本

東京 あさひが丘

男

男

女

女

大阪 フク田家

母

父 死亡

(6くらい)

ワカメ

(9)

カツオ

(11)



(9くらい?)

サザエ

(24)

マスオ

(28)



(3)

兄 サケオ



妻



リオ

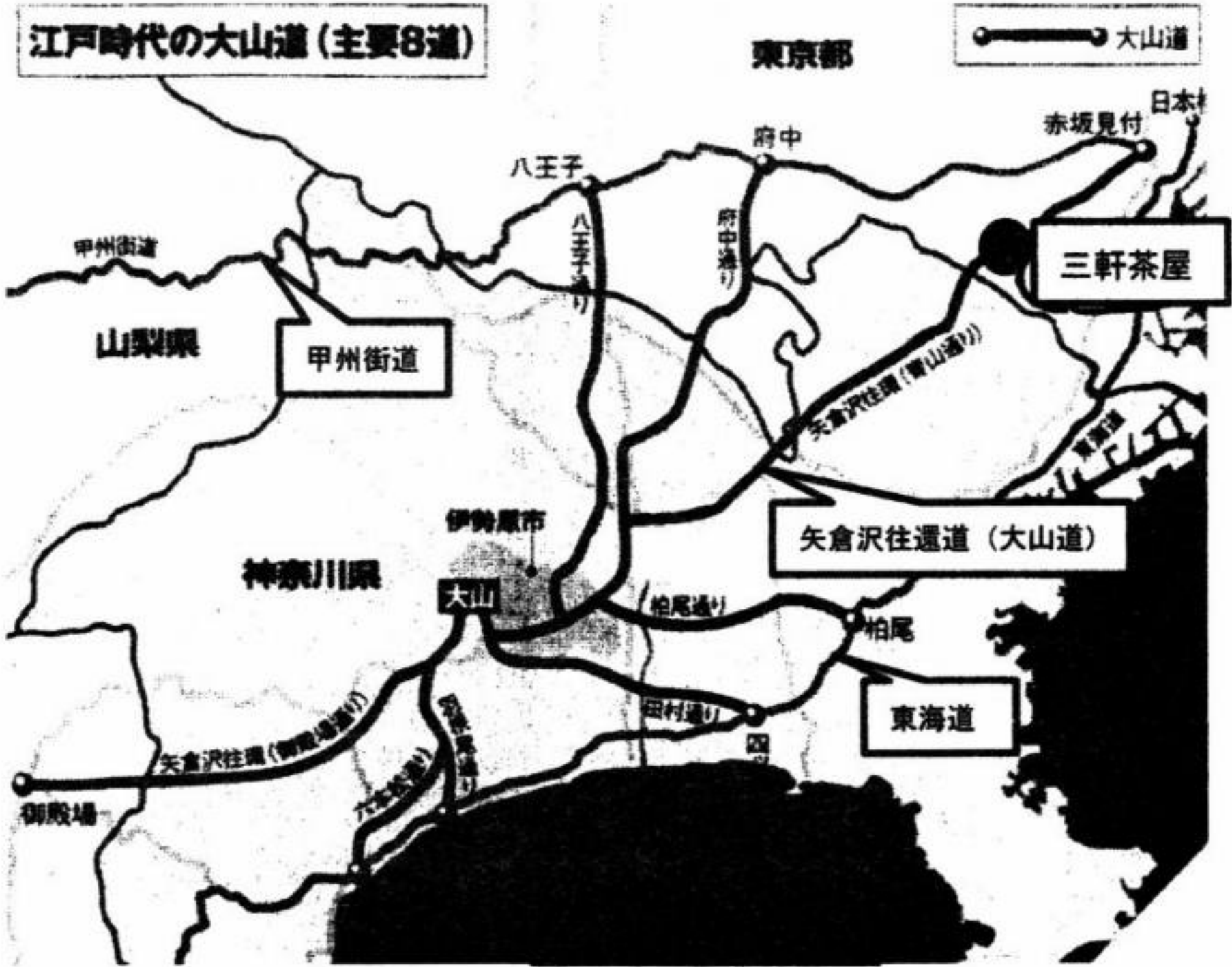
(11~12)

● 三軒茶屋

- ・三軒茶屋は、国道二四六号線（玉川通り）と世田谷通りが分かれる岐点である。
- ・江戸時代にこの追分の地に信楽しがらき（石橋屋）・田中屋・角屋の三軒の休み茶屋があり、そこから三軒茶屋と呼ばれた。現在田中屋は陶器屋として残っている。
- ・また矢倉沢往還（大山道）の目標になり、青山から世田谷新宿・用賀・二子を経て多摩川を渡り、伊勢原・足柄峠の矢倉沢に至る道筋であった。
- ・江戸中期以降、江戸市民の大山詣が盛んになると、休み茶屋として賑わった。



大山道標
 寛延2年（1749）建立。文化9年（1812）に再建されたと思われる不動尊の道標で正面に、「左相州通大山道」側面に「右富士、登戸、世田谷通」「此方二子通」と云う字が刻んでる。かつて、玉川電車もここで分岐、左路線は二子玉川へ、右路線は下高井戸まで行っていたが、昭和44年玉川線は廃止となり、今は三軒茶屋～下高井戸間が世田谷線として運行している。



● 目青不動（教学院）

○竹園山最勝寺 教学院（天台宗）

・本寺は慶長九年（一六〇四）、玄応和尚の開基により、江戸城内紅葉山に建てられたという。のち、明治四十一年、青山からこの地にうつされた。

・本尊は阿弥陀如来で恵心僧都の作と伝えられる。不動堂の目青不動は五色不動の一つとして有名である。

・境内には相州小田原城主大久保家歴代の墓、南画家岡本明暉・岡本碧巖の墓がある。



教学院



五色不動

- | | | |
|---|-------------------|--------------|
| 5 | 目青不動
(世田谷区太子堂) | 教学院
(天台宗) |
| 4 | 目黄不動
(江戸川区平井) | 永久寺
(天台宗) |
| 3 | 目赤不動
(文京区本駒込) | 南谷寺
(天台宗) |
| 2 | 目白不動
(豊島区高田) | 金乗寺
(真言宗) |
| 1 | 目黒不動
(目黒区下目黒) | 瀧泉寺
(天台宗) |

五色不動の諸説

・五色不動は、將軍家光の時代天海大僧正が天下太平を願い江戸城の守り場所とした。

東 || 青 || 青龍・南 || 朱 || 朱雀
西 || 白 || 白虎・北 || 黒 || 玄武
中央 || 黄 || 皇帝

・江戸五街道の守護

東海道 || 目黒不動
中山道 || 目赤不動
川越街道 || 目白不動
甲州街道 || 目青不動
日光街道 || 目黄不動
水戸街道 || 目黄不動

・この世は、地(黄)・水(黒)火(赤)・風(白)・空(青)の五大要素で成り立つ密教の教。將軍吉宗が享保年間に、花見場所など休養の五ヶ所を選定されたものだ。

松陰神社



吉田松陰の墓

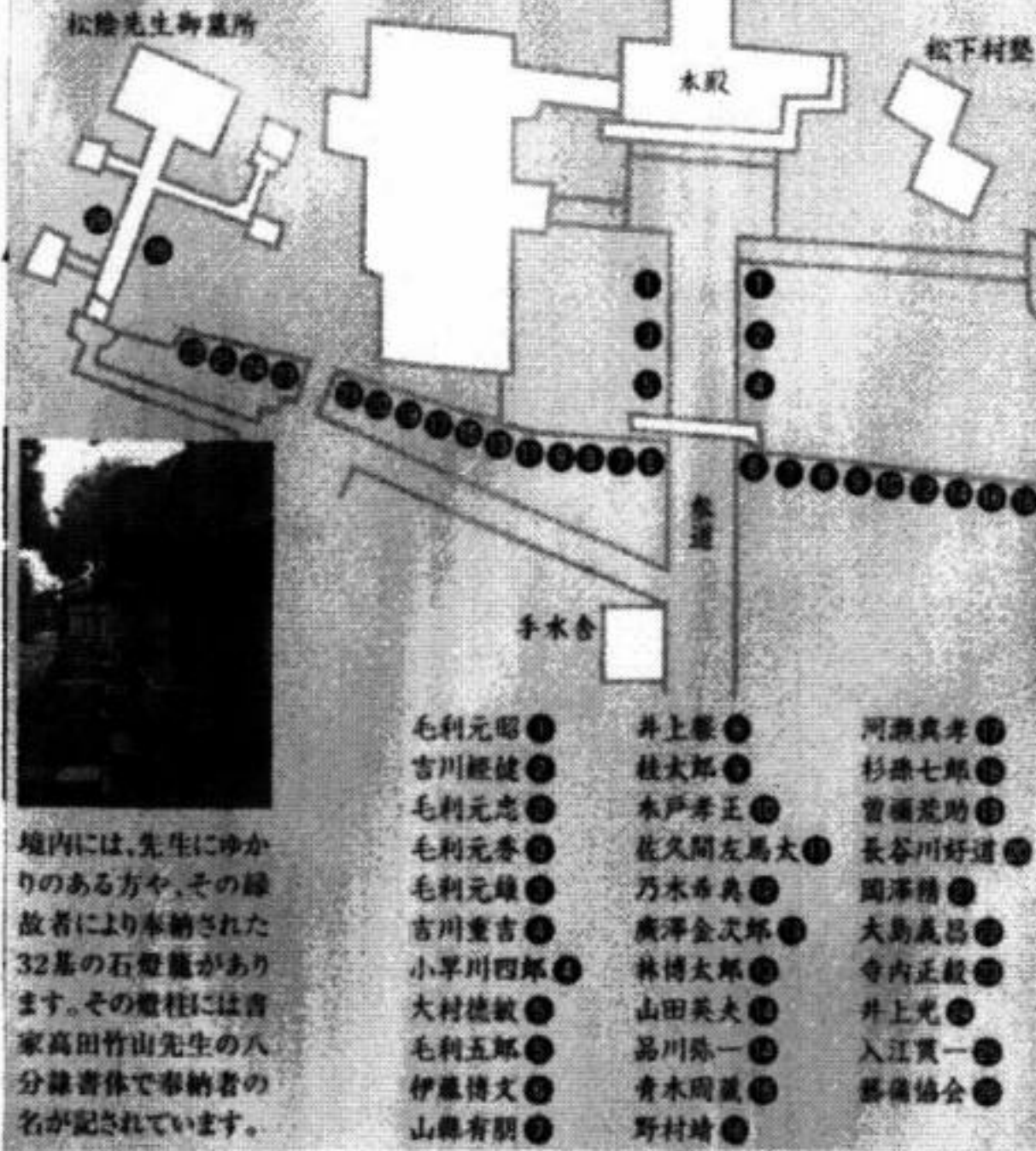


松陰神社



松下村塾

石燈籠配置図



境内には、先生にゆかりのある方や、その縁故者により奉納された32基の石燈籠があります。その燈柱には書家高田竹山先生の八分録書体で奉納者の名が記されています。

○幕末の尊王論者・吉田松陰を記る。

松陰は、安政の大獄で捕えられ、安政六年（一八五九）六月二十七日、二十九歳の若さで江戸小伝馬町の牢に送られ、牢の庭にて処刑された。遺体は、小塚原の回向院（現南千住）に葬られた。

文久三年（一八六二）、高杉晋作ら門弟によって、若林村（毛利藩が買い取った土地Ⅱ抱屋敷）の現在地に移された。明治十五年、旧長州藩の門人達が墓の東側に小さな社殿を建てたのが、神社の起こりである。

○吉田松陰

松陰は、天保元年（一八三〇）、長州藩萩（山口県萩市）の杉百合之助の次男として生まれる。五歳で親戚（叔父）吉田家の養子となる。吉田家は山鹿流兵法を代々伝える家であった。

長州藩では藩主の前でその実学の一部を講義するしきたりがあり、松陰も十一歳・二十歳・二十一歳の三度に渡って講義した秀才であった。その後、藩主に従い江戸に出、佐久間象山らに師事し洋学を学んだ。

安政元年（一八五四）ペリーのアメリカ艦へ乗り込み海外潜行を企てたが失敗、国禁を犯した罪で獄に下る。在獄三年、許された松陰は松下村塾を開き多くの門人を薫陶した。

その門下から高杉晋作・久坂玄端・伊藤博文・山形有朋らが輩出した。安政の大獄に反対し、閣老間部詮勝の襲撃を計画して捕らえられ、波瀾に満ちた生涯を閉じた。

吉田松陰、処刑（伝馬町獄舎）から松蔭神社改葬まで

（松蔭神社記「松蔭先生と松蔭神社」より）

常時先生は早くから死を期して周く事を措置したが、此の二十日江戸在番の飯田正伯、尾寺新之丞等の人々に与えた書中に首埋葬のことが詳細に記されてあった。二十六日の夜、執政周布政之介は尾寺を藩邸に招いて、明朝評定所で松蔭の断獄がある事を告げたので、尾寺は二十七日早朝、飯田を伴って評定所に向つた。門前の露店で先刻、重罪人を伝馬町に護送したとの事を聞いて、伝馬町の獄卒金六を訪ね、初めて先生は四ツ時（午前十時）すでに処刑された事を知った。若干の金を金六にわたし、遺骸を下げ渡してもらえよう謀らせた。金六は金を獄吏に賄ったが獄吏は容易に許さなかつたので、二人は屍を穢多の手に渡さないように願ひ置き、さらに二十八日再び金六の手を経て百万尽力をしたが猶許されなかつた。二十九日飯田自ら吏を訪ね懇談したので、「獄中死屍の処分は苦しむ」を建前とし、今日正午、小塚原回向院で亡骸を引き渡すことを約束した。二人は桜田藩邸に至つて、桂小五郎（木戸孝允）及び伊藤利助（博文）に実を告げ、大變と巨石を購ひ回向院に赴いたが木戸、伊藤はすでに先にそこに行きついでいた。幕吏が来て、回向院の西北にある刀剣試験場傍らの藁小屋から一つの四斗樽を取つて来て、これが吉田氏の亡骸であるといつた。四人は環立して蓋をあけたところ、顔色は猶生けるが如く髪乱れて顔に被り血流れて、かつ身体には着衣もなかつた。四人はその惨状を觀て憤恨の情を禁ずることが出来なかつた。そこで飯田は髪を束ね、桂、尾寺は水をそそぎて血を洗い、そして首と体を接しようとしたが吏はこれを制して、「重刑人の屍は他日検屍があるかもしれぬ、接首などが発見されれば余等の罪は軽くない、幸に推察を請う」と頼むので、飯田は黒羽二重の下衣を、桂は襦袢を脱いで体にまとい、伊藤は帯を解いて結び、首を其の上に置いて甕に納め、橋本左内の墓の左方に葬り上に巨石を覆つた。後、數日を過ぎて飯田、尾寺は碑を建て其の中央の正面に「松蔭二十一回猛士」、右方に「安政己未十月念七日死」、左方に「吉田寅次郎行年三十歳」と彫り、右側面に「吾今為国死死不负君親悠悠天地事、鑑照在明神」の詩、左側面に「身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも留置まし大和魂」の歌を刻んだ。これらの費用は周布政之介の計らいで藩の公金から支出された。

しかし幕府は命を下し院内志士の墓碑を壊させた。先生の碑も同様に徹せられたが、後四年を経て文久二年（一八六二）八月、長州藩世子毛利定広公（元徳公）が天使大原重徳郷と共に孝明天皇の御意向を幕府に伝えた文中に「戊午（安政五年一八五八）以来、罪を国事に得たる者を釈し（許し）罪名を削るべし」との事があつた。

そこで久坂義助（玄瑞）等は再び碑を先生の墓に立て直した（碑は現在も回向院にある）。しかし小塚原は刑死者を葬る穢れた地であり、忠烈の士の亡骸を安ずべき所ではないとして、改葬の儀が起り遂に幕府の許しを得、荏原郡若林村の大夫山（だいぶやま）に移す事となつた。大夫山は延宝二年（一六七四）に二代藩主毛利泰藏公（綱広公）が在府の時、徳川氏旗本志村勘右衛門の領地

内の農民の土地を買い、火災の避難地としていた所で、地形は丘をなしており、林の傍らに別邸があつたので、村民は長州藩主の通称松平大膳大夫にちなみ大夫山（だいぶやま）、長州山と称していた。しばらくして松蔭先生及び先生と同じく国に殉じて墓を接する頼三樹三郎・小林民部を改葬することとなり、高杉晋作・伊藤博文・山尾庸三・白井子助等は主宰者となつて、山尾・白井は前夜小塚原に向かい予め事を整え、翌朝高杉等が皆会して三人の墓を掘り遺骨を新棺に納めた。そしてその墓は「忠士の血痕を印した地であるから、破壊するに忍びない」として墓を修復し碑を保存した。この日の儀礼は厳肅にして、門人等は松蔭先生等を納めた棺を護り、高杉が馬に乗り先頭となつて進んだ。上野山下の三枚橋の中橋迄来た時、この橋の番人がどなりつけ、この列を止めようとした。中橋は、將軍が東叡山寛永寺に参詣する際通る橋であり、諸侯以下庶人は皆左右の橋を渡る規則となつていたからである。この時、高杉は鞭を振り上げ「我々は、勅使を奉じて長州の同志、忠烈の士の遺骨を葬る途中である。この橋を渡るのに何の不都合があるか」と叱り付け、番人が高杉の勢いにのまれ立ちすくんでいる間に渡つてしまつたといふことである。かくして大夫山に達し、埋葬の儀がすべて終つたのは黄昏の頃であつた。數日後、高杉等は来原良藏の墓を芝青山寺より松蔭先生の墓側に移し、其の十一月笠原半九郎も友人である福原乙之進を葬つた。後、元治元年（一八六四）七月、京都にて禁門の変が起り幕府は江戸の桜田（日比谷）、麻布にあつた長州藩の上、下屋敷を没収、人を遣わして大夫山に火を放ち別邸を壊し、松蔭先生等の五つの墓も破壊させた。以来、国内は動乱の時を迎え墳墓の修繕には及ばなかつたが、明治元年十一月、江戸在勤の藩吏内藤左兵衛は墳墓破壊の事を徳川氏に抗議したが、当時徳川邸の公儀人であつた前島来助（蜜）の返答が要領を得なかつたので、木戸孝允は藩命を受け土木吏井上新一郎（信一）に命じ、新たに松蔭先生の墓をたて更に城内に綿貫治郎助の墓を移し、中谷正亮及び元治元年（一八六四）の禁門の変の際幕吏に殺され或は幕獄で死んだ四十五人の招魂碑を建てた。さらに木戸氏は「大政一新の歳、木戸大江孝允」と刻んだ鳥居を寄進し墓域の入口に建て、徳川氏も墓の修復の事を聞き葵紋のついた水盤一基と石燈籠一對を贈つた。明治二年七月、整武隊の長官が鳥居より墓前に至る道に石をしいて参拝に便ならしめた。かくして墓域は完成し、長く忠魂の鎮座する所となつた。

明治十五年、毛利元憲公ならびに門人、旧知の人々が相謀り墓畔に社を築いて松蔭神社とした。また其の靈を祀り、十一月二十一日祭典を行った。この日は、二十四年前の松蔭先生殉節の日にあつたといふ（十月二十七日は陽暦で十一月二十一日）ので例祭日としたが、現在は陽暦の十月二十七日、四月二十七日の両日を例祭日としている。

明治十五年十一月、墓畔に松蔭神社を建てたことが上聞に達し、思召しを以て金を賜つた。後、松蔭先生の自贊肖像、留魂録、山河襟帯詩幅等が天覧に達し、明治二十一年五月五日旧別格官弊社靖国神社に合祀され、明治二十二年二月十日特旨を以て正四位を贈られた。

現在の社殿は昭和三年の改築の際に造営されたものである。

● 世田谷代官屋敷（大場代官屋敷）

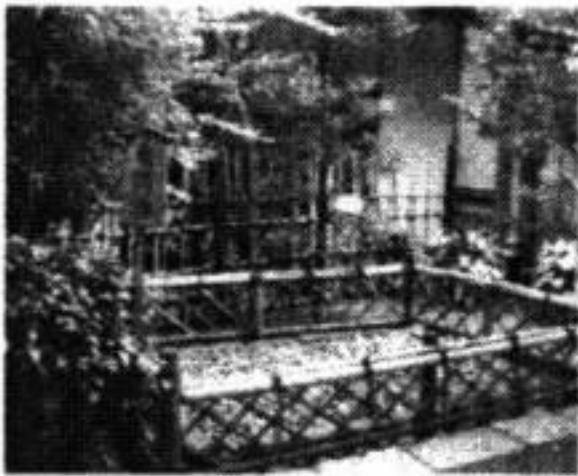
○大場家の住宅

- ・寛永十年（1633）、幕府より彦根藩主・井伊直孝が江戸屋敷の賄料として世田谷十五カ村（のち二十カ村・二千三百余石）を賜った時、この世田谷領二千三百石の代官に任ぜられたのが大場家であり、その代官屋敷が大場家の住宅である。
- ・大名領の代官屋敷としては都内唯一の存在であり、その由緒により昭和二十七年、「都史跡」に指定される。
- ・屋敷の表門（長屋門・茅葺）は、国の重要文化財に指定されている。
- ・現在の建物は元文二年（1737）に建てられたもので、その後、幾度かの改修があり、住宅主屋とともに近世中期の代表的上層民家としてよくその旧態が保存されている。
- ・広間から客室の長押には、槍・薙刀や捕物の道具がかけてある。なぜか代官の居間だけに天井があり、役所の間に向かいの庭に、罪人を取り調べる白州に敷かれた白砂利がある。

○大場家

- ・大場家は相模国の豪族大庭氏の末裔であると伝えられ、中世、吉良家の四天王として吉良家に従い、世田谷の地に定住した土地の有力者である。

- ・寛永十年（1633）、代官に命じられて以来、明治維新まで約236年間その職を世襲した。



白州跡



表門（国重要文化財）

● ポロ市

・徳富蘆花「みみずのたは」との一節

「十五日が世田谷のぼろ市、世田谷のぼろ市は見ものである。……東京中の煤掃きの塵箱をここへ打ち明けたような、あらゆるぼろやガラクタずらり並べて売る者も売る、買う者も買うと、ただ驚かるるばかりである。……世田谷のぼろ市を観て悟らねばならぬ。世に無用なものはない而して悲観は単に高慢であることを」

・世田谷の名物ポロ市は

普通の骨董市でもバザーでも縁日でもない。さまざまな日用雑貨や食品・植木・古道具・古着が売られる「市」である。毎年一月と十二月の十五・十六日開かれる。

・ポロ市の始まりは一五七八年

当時、関東一円を納めていた小田原城主・北条氏政の命で、世田谷城主吉良氏朝が世田谷宿に「楽市」を開いたことからはじまった。小田原と江戸を結ぶ重要な街道だった大山道（現在のポロ市通り）には多くの商人が集まり、大変な賑わいをみせた。

・明治時代までは

ポロが売り物の主流であった。大正時代は筵、大震災後は植木、昭和以降は新しい衣料品や雑貨のほか、見世物小屋や芝居小屋も出た。

・全長4kmほどに

最盛期は二〇〇〇店、戦後は二kmほどにせばめられ、露店数は六〇〇から七〇〇に減ってきた。

・「楽市」とは

毎月一定の期間、誰でも自由に店が出せ、しかも税金を払う必要もないことから、気の楽な市という意味で楽市と呼ばれた。



ポロ市



世田谷城址公園に残る土塁と空堀

● 世田谷城跡

・世田谷吉良氏八代二百数十年の館跡である

一四世紀半ばごろ、吉良治部大輔治家が、足利基氏の命でこの地に移った時に築いた城で、城域は豪徳寺の境内を含めた台地全体に及んでいたとみられる。北・西・南の三方を土壕で囲んだ平山城で、防御堅固な城であったという。

・天正一八年（一五九〇）

豊臣秀吉が小田原城を攻めたおり、北条氏と縁戚関係にあった八代城主氏朝は、戦わずして下総に逃げ、城は廃城となった。

・城壁の一部は

徳川氏の江戸城修築として、持ち去られたという話が残っている。現在、わずかに土豪・石垣が当時の面影をのこすのみである。

豪徳寺 (大谿山洞春院)

○豪徳寺の前身

・本尊は釈迦如来。文明十二年(一四八〇)、吉良頼高の娘で同政忠の叔母にあたる弘徳院のために城内(世田谷城)に創建された小庵で、初め臨済宗に属し、弘徳院と称したと伝え、天正十二年(一五八四)、曹洞宗に転じた。

・寛永十年(一六三三)、世田谷領を領した近江彦根藩主井伊直孝が大檀那となって堂宇、社殿を造営、井伊家代々の江戸菩提寺となった。直孝は中興の開基とされる。

・万治二年(一六五九)、直孝が没すると、その法号久昌院殿豪徳天英居士にちなみ豪徳寺と寺名を変えた。直孝の娘掃雲院は父の冥福を祈るため多くの浄財を寄進した。これにより当寺は大伽藍を備えた寺となった。

・幕末の彦根藩主で万延元年(一八六〇)、江戸城桜田門外で暗殺された井伊直弼は同寺に葬られた。墓のそばに桜田殉難八士の碑や、墓守として一生を当寺で終えた遠城謙道の墓塔もある。



総門 (碧雲関)

下図名称 (現存)

- 1 臥龍楼
- 2 選仏殿・本堂・仏殿
- 3 総門 (碧雲関)

江戸名所図会



○招き猫（招福殿）

- ・安政の大獄が因で暗殺された井伊直弼の墓がある豪徳寺は、招き猫として有名である。
- ・彦根藩二代目藩主・井伊直孝が鷹狩の帰りに門前を通りかかると手招きする猫がいる。不審に思つて寺により、和尚の話聞きながら渋茶などを飲んでいると、一天にわかには大變な豪雨になつた。
- ・直孝はこの幸運を喜び、福を招く猫のいるこの寺を大事にし、井伊家の菩提寺としたのが豪徳寺の始まりだと伝えられている。当時は弘徳庵という小さな庵だったが、直孝の戒名を取つて豪徳寺となり今に至っている。
- ・猫が耳の後ろを搔くと雨になる、という言い伝えがあるので、豪徳寺の猫も特別な猫ではなかつたと思われる。
- ・名もない寺を有名にしたという意味では、「招福猫児」の名に値する招き猫であつた。



招福殿の招き猫



井伊直助の墓



三重塔

○井伊直弼の墓

- ・井伊直弼（一八一五〜一八六〇）は彦根藩主直中の子で、兄を継ぎ藩主となり、ついで嘉永三年（一八五〇）大老になる。勅許を待たず日米修好通商条約など安政五ヶ国条約に調印。また十三代將軍家定の後継者を慶福（のちの家茂）に決定し、反対派の一橋慶喜を抑えるという強い政策を実施。さらに安政の大獄を断行するに及んで、常に暗殺の危険にさらされ、遂に安政七年三月、江戸城外桜田門外において、水戸・薩摩の浪士らに暗殺された。
- ・世田谷郷は井伊家領であり、直弼は豪徳寺に埋葬された。墓石の高さは3m42cm、正面に「宗観院殿正四位上前羽林中郎將柳曉覚翁大居士」とある。

(以下は平成九年、第二四五回史跡めぐりレジュメより・案内者野村勝八氏)
◆安政の大獄

安政四年(一八五七)六月、老中阿部正弘の死去後、幕閣の実権派老中堀田正睦(佐倉藩主)に移り、背後にいわれる南紀派と呼ばれる家門・譜代大名がおり、その指導権を彦根藩主井伊直弼が握っていた。

これと対立したのが攘夷主義の立場をとっていた徳川斉昭以下、いわゆる一橋派と呼ばれる家門大名らの一派であり、将軍の後継ぎ問題等で激しく対立した。南紀派は徳川慶福(のちの家茂)を擁立し、一橋派は一橋慶喜を擁立した。しかし井伊が大老に就任すると、独断専行により慶福を将軍後継ぎに決定したのである。更に勅許を得ぬままに日米通商条約に調印するという暴挙に出た。一橋派は将軍後継ぎ問題ばかりでなく、違勅調印を理由にいっせいに井伊攻撃にたちあがったのである。

この事態を幕府の危機とみた井伊は、一橋派への徹底的な弾圧策をとったのである。これが安政の大獄といわれるものである。では、安政の大獄とはどのようなものであったかを、具体的にみることにしよう。多数の志士等が検挙・断罪されているが、「安政の大獄処罰者一覧」によると次の通りとなる。

安政の大獄処罰者一覧

(処分別一覧)		(身分別内訳)	
切腹	1名	宮・家臣	20名
死罪	6名	幕藩	9名
獄門	1名	諸儒	20名
遠島	9名	神僧	3名
追放	1名	職侶	2名
追放	13名	商他	2名
所払	3名	その他	13名
その他	45名	(計)	10名
(計)	79名		79名

※処罰者が宮・公家から庶民に至るまで広範にわたっていることがわかる。

※処分を受けた主な人々

公家	大名	諸藩士	通	他
			鷹司実萬	
			三条忠照	
			近衛忠昭	他
			徳川慶喜	
			一橋慶永	他
			松平慶永	
			吉田松陰	
			頼三樹三郎	他
			池内大学	

◆桜田門外の変

井伊直弼は、安政の大獄の返り血を浴びた。

安政七年(一八六〇)三月三日のことであった。いわゆる桜田門外の変である。直弼らは雪の降りしきる中、三宅坂の彦根藩邸をいつものように駕籠で出発。午前九時ごろ、行列が桜田門にさしかかったとき一発の銃声を合図として、浪士達が襲いかかったのである。

不意をつかれた井伊の行列は崩れ、雪のため雨具がとっさの防衛を妨げた。抵抗するも虚しく、井伊は駕籠から引き出され首を斬られた。

井伊大老を襲ったのは水戸藩志願鉄之介ら十八名(水戸藩志十七名、薩摩藩士一名)で、指揮は関鉄之介がとり、首級をあげたのは有村次左衛門(薩摩藩士)といわれている。井伊直弼四十六歳の時の不幸な出来事であった。

その背景は――

大老の暗殺は、直接には朝廷から水戸藩に下された勅諭の返納問題に対する、水戸藩志たちの復讐だと見る事ができる。

問題の勅諭とは、勅許を得ぬままの日米通商条約締結に激怒した公明天皇が、水戸藩に下したもので、条約調印を非難し挙国攘夷を要請するものであった。井伊は「安政の大獄」後、水戸藩に対し問題の勅諭返納を命じ水戸藩はそれに応じたため、この決定に不満を持った過激派が井伊大老の暗殺を計画実行したものである。

※斬奸趣意書

- 一、外国の圧力におびえた幕府が、不当な条約を朝廷の意向を無視して独断でむすんだことは、国体をそこなう大失態である。
- 一、井伊大老は、幼い将軍を推し立てることによって自らの権威をほしいままにしうとして、反対する親藩・大名・旗本を処罰した。さらに朝廷から水戸藩に勅命書が降下するにおよんで、安政の大獄を起し、志士・公家・家臣をはじめ青蓮院宮鷹司政通ら高位の公家まで処罰した。
- 一、以上の暴政を専断した井伊大老をそのままにしておいては政道は乱れ、外的の害が増すことはあきらかなので、天誅を加えた。
- さらに、この襲撃が決して幕府に敵対するものではなく、幕府を正道にもとす目的で決行したものであるとしている。

◆変のその後

井伊家

直弼を桜田門外の変で失った井伊家は、別の意味で重大な危機を迎えた。お家断絶の危機である。藩主が自らの過失で死亡、または生前に跡目相続をせずに死んだ場合は、家名断絶という幕府の掟があった。井伊直助の死はこれに相当し、名家の井伊家はお取潰しとなり、藩士は浪々の身とならざるをない。また、水戸藩に対しても相当の処分をせざるを得なくなる。

しかし老中安藤信睦が機敏に動いた。(安藤信睦は直弼死後、幕閣の中心となる) 安藤は井伊の幕府に対する功績を考慮しつつ、彦根・水戸両藩の武力衝突するような事態を避けるため、彦根藩の安泰をはかり、水戸藩に対しても存亡にかかわるような制裁をくわえぬことが最も賢明な道であると考へ幕府に具申したのである。

「井伊大老が死亡したことを隠し、負傷しただけとして、その間に跡目相続をすれば彦根藩は存続でき、水戸藩には、当分の間事態を平静に保つようはからうこと」

これがすべてを穏便に収まらせるための安藤苦心の配慮の結論であった。幕府も安藤の意見を採用したのである。井伊家は直ちに幕府に対し直弼病気の届出書を提出し、子の愛鷹(後の直憲)を跡目相続人とし、井伊家存続問題は解決した。

水戸藩

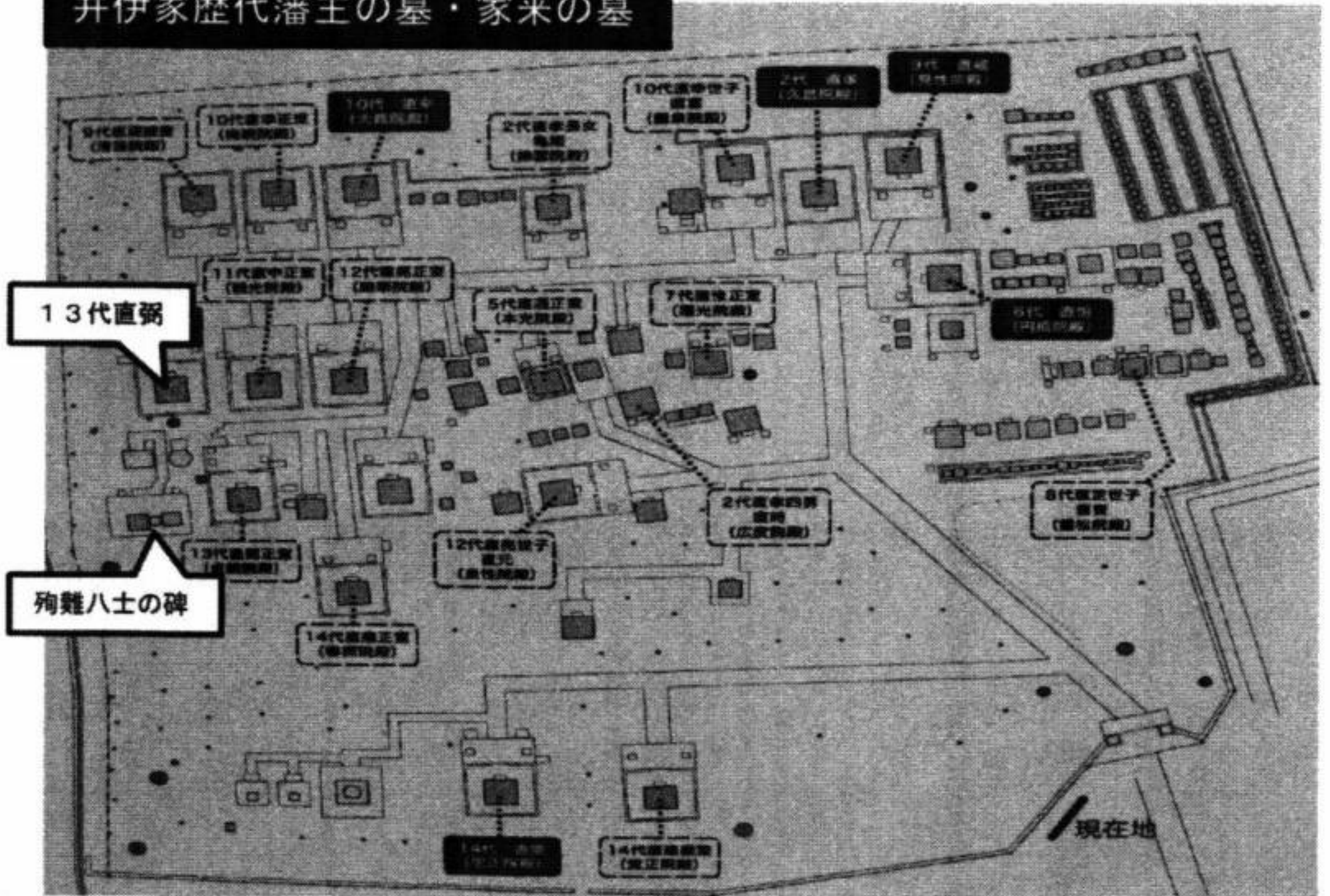
桜田門外の変後、水戸藩の外圧に対する危機意識が生んだ攘夷論は、長州と薩摩が引き継ぐ形になってゆく。安政七年八月、徳川斉昭が蟄居とけぬまま六十一歳逝去すると、藩内の抗争が表面化するなど時代の波に押し流されまいとする苦悩の日々が続いていく。

※井伊直弼を襲った水戸藩士らは自刃し、あるいは重傷を負ったり自首したりしたが、何人かは逃亡潜行するが、やがて捕えられ厳しい処分を受けた。

(処分内容)

討死	稲田重蔵
深傷で死亡	佐野竹之介等 3名
自刃	有村次左衛門等 5名
死罪	関鉄之介等 7名
余命全う	増子金八等 2名

井伊家歴代藩主の墓・家来の墓



● 世田谷の歴史

知行図 (近世中期以降)



近世の村落支配

〔中世鎌倉時代の初め〕

現在の世田谷区は、今の喜多見に本拠を持つ江戸氏(喜多見氏)の支配となる。

〔室町時代に入って〕

世田谷は足利氏の有力な一族であった世田谷吉良氏の領知となり、その吉良氏の城下町として発展、江戸と小田原を結ぶ相州街道・甲州街道・大山街道などの通る交通の要衝の位置を占めるとともに、定期的に市がたてられて、関東有数のにぎわいをみせるようになった。

〔寛永十年(一六三三)〕

彦根藩の井伊氏が江戸屋敷の賄料として世田谷・弦巻など十五村を支配、ついで太子堂村など十村を支配するようになって、世田谷の大部分は彦根領となる。井伊氏は、かつて吉良氏の家臣であった大場家をして世田谷を治めさせた。

〔江戸中期以降〕

江戸市中向けの野菜などを供給する典型的な農村となって栄えた。

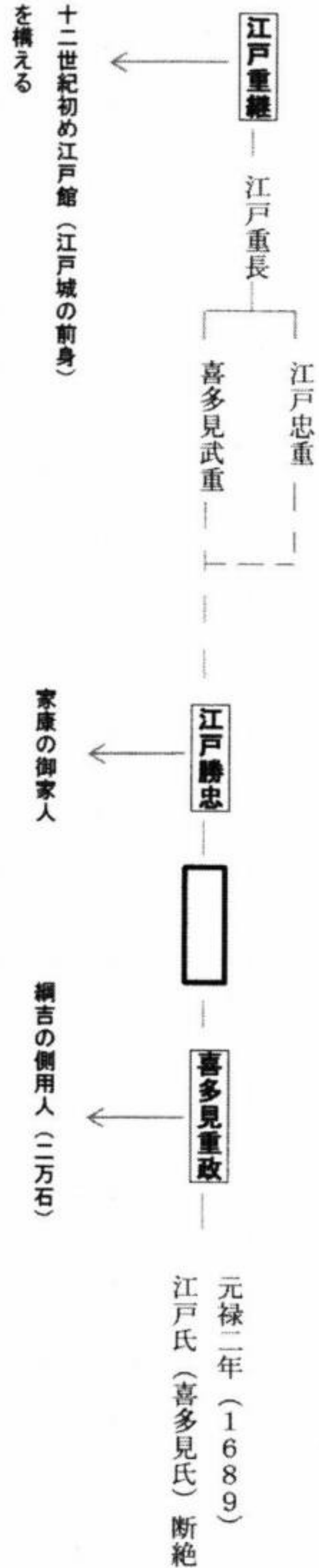
〔明治四十年〕

渋谷―二子玉川間に開通、初めは多摩川の砂利を都心に運んだ。

〔大正十二年〕

町制、昭和七年、区制となる。

江戸氏＝喜多見氏

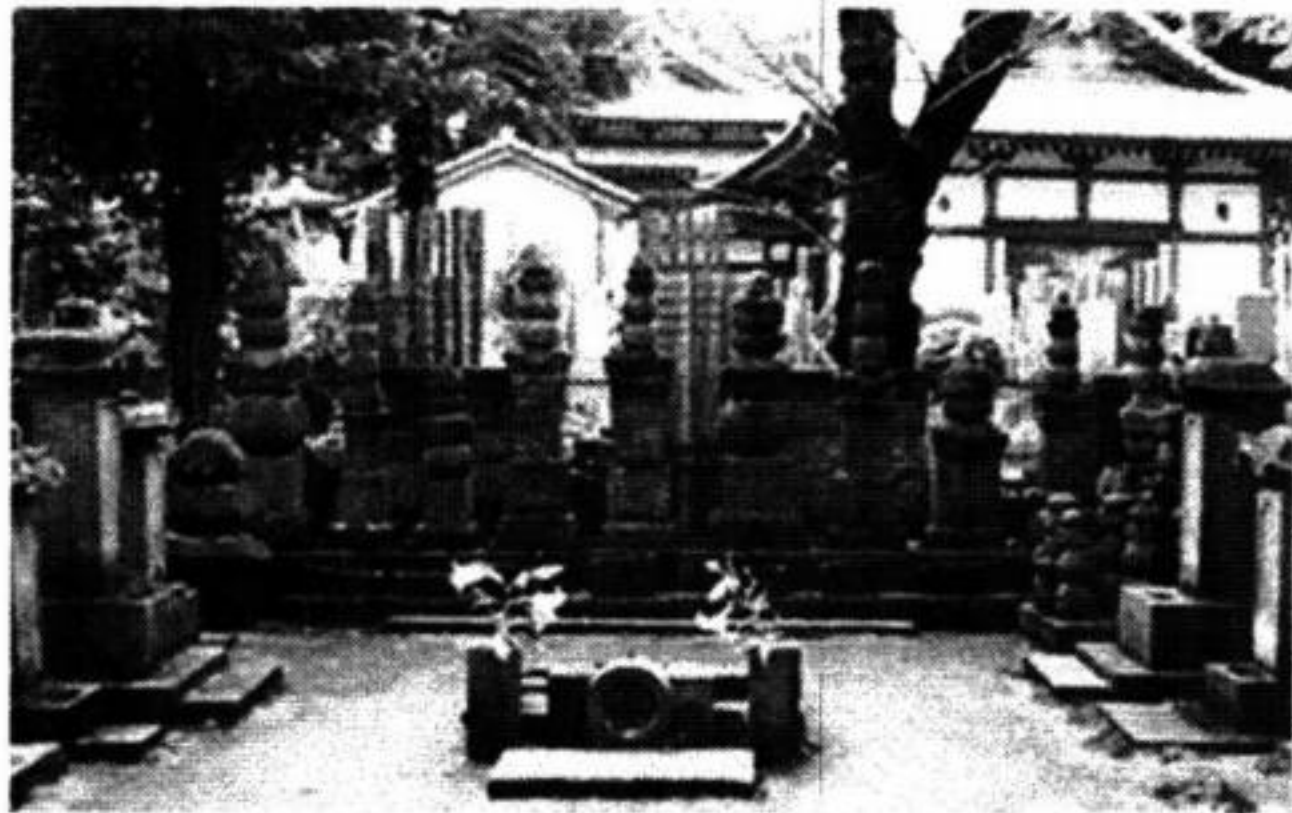
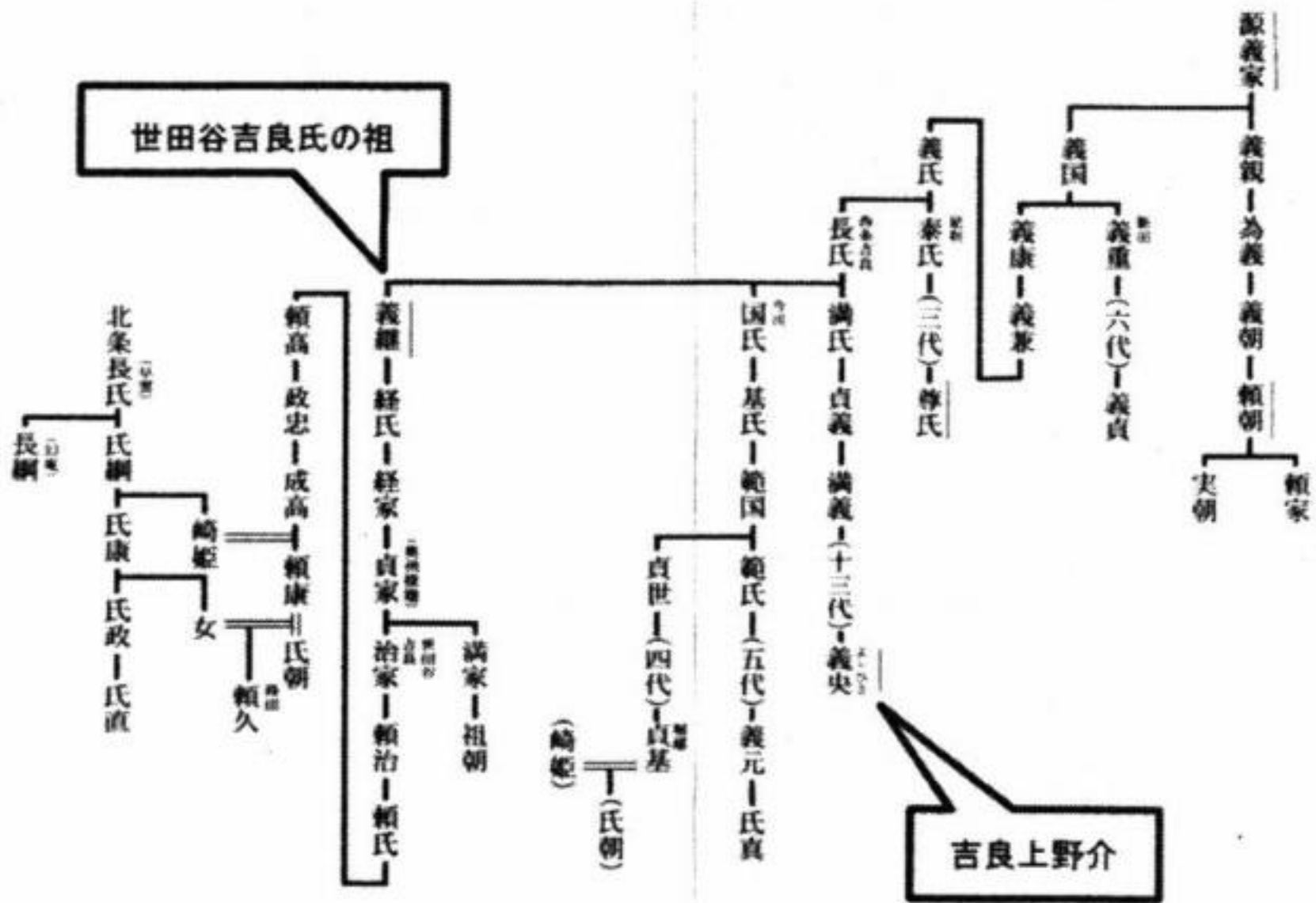


喜多見氏＝江戸氏の墓所（喜多見慶元寺）

- ・喜多見氏は武家の名門・江戸氏の末裔で、室町時代の中頃、旧領江戸庄を離れ、世田谷喜多見の地に移住したと伝えられる。この地に移った江戸氏は、吉良氏と後北条氏に臣下の礼をとっていた。
- ・天正十八年（一五九〇）、江戸勝忠は、豊臣秀吉の小田原征伐によって主家が没落したため、喜多見の地に一時潜居した。その後、関東に入国した家康の御家人となる。
- ・勝忠は家康がその居城を江戸に定めたので、江戸姓を名乗る事はばかり、以後、喜多見氏の姓を名乗ったという。
- ・勝忠の孫・重政は五代将軍・綱吉の側用人となり、二万石の大名にまで出世したが、元禄二年（一六八九）一族の刃傷事件に連座して御家断絶となった。

● 世田谷吉良氏

吉良系図



世田谷吉良氏墓
(豪徳寺西側勝光院)

・吉良氏は清和源氏・足利氏の支族で、三河国幡豆郡吉良庄より起こった。世田谷吉良氏はその庶流で、足利義継を祖とし、二代当主経氏の時、吉良姓を名乗ったという。

・室町幕府の時、奥州探題となり三代将軍義満の治世に至って、治家は鎌倉公方・足利基氏の招きにより上野国飽間に移住することとなった。

・世田谷城は、この吉良氏が世田谷の地に築いた居館で、構築年代は不明である。治家が鎌倉鶴岡八幡宮に宛てた寄進状(一三七六)から、この時代には既に吉良氏の領地が世田谷郷内にあったことだけは確かである。

・世田谷と蒔田(現横浜市)の二ヶ所に本拠を置いた吉良氏は、「世田谷吉良殿」「世田谷殿」「蒔田御所」などと称せられ、足利將軍家の御一家として、諸侯から一目置かれる特異な存在であり、その地位の高さをうかがい知ることができる。

参考資料

- ・「世田谷の歴史と文化」
世田谷区立郷土資料館
- ・「せたがやの文化財」
世田谷区教育委員会
- ・「世田谷代官屋敷」
同断
- ・「松陰神社」パンフ
- ・長谷川町子美術館パンフ
- ・目青不動縁起
- ・豪徳寺縁起
- ・越谷市郷土研究会第245回史跡めぐり資料（野村勝八氏）